

2018年4月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2018年4月
第 114号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

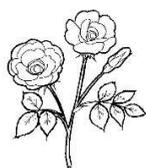


目 次

漢点字の散歩 (51) (岡田健嗣)	1
点字から識字までの距離 (107) (山内 薫)	7
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子)	14
ご報告とご案内	22
漢文のページ	23
編集後記 (木下和久)	27

漢点字の散歩(五十一)

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字(3)

本会ではこの三月に、毎年取り組んでいる横浜市中央図書館への納入書として、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の第六巻を完成させ、同図書館に納めることができました。毎年同じように製作して納入して参りましたが、簡単にことが運んでいるわけではございません。漢点字の本を作るといことは、コンピュータによる作業によって行っているとは申しても、手で入力し、人の目で校正を市、編集し割り付けし……という一連の作業の最終工程として、点字プリンターでの打ち出し・製本・装幀を終えて、晴れて図書館の蔵書としていただくべく納入に漕ぎ着けることができるものです。つまり、コンピュータを介在しての作業ではありません。その大半は手作業であり手作りのです。校正については東京の会員のご協力もいただいております。会の総力を挙げて完成です。そのようにして完成した本書の、最初の読者という栄に浴することができているのが、この私です。

ここところは十年の計画で、この『萬葉集釋注』に取り組んで参りました。昨年度の納入分で、その計画の半ばを達成したことになります。当初は天を仰ぐような気持ちで始めましたが、会員の皆様の弛まぬ努力が、その成果を結んだものに他なりません。

このようにして二十年を超える歳月を過ごして参りました。この間に横浜で、図書館への納入書として完成しました漢点字書は、私が全て最初の読者となることができましたし、東京の活動の成果も、同様に全て読ませていただいております。時間と体力（点字を触読することは、かなりの体力を要することなのです。）の許す限り、読むのが私の使命と心得ているからに他なりません。

拙文の前回の最後に、「ますます謎が深まる」と書きました。どんな「謎」なのか、もう一度整理してみたいと思います。

私が漢点字を学んで漢字の世界を知って、そしてこの「漢点字羽化の会」の会員にお集いいただいて、漢点字訳書の製作を始めたのが今から二十年余り前のことでした。しかしそれまでは、漢点字を学んだとは言え、漢点字を読むということはほとんどありませんでした。漢点字の創案者である川上泰一先生が主催して

おられた日本漢点字協会では、当時、漢点字書の製作を始めておられました。しかし残念ながら私が読みたい本までは、なかなか手が回らないご様子でした。そういうこともあって、私自身が漢点字書の製作に手を染めない限り、私が漢点字の本を読むことは叶わないであろうことが段々分かって参りました。

しかし、自らが希望する漢点字書が手に入りさえすれば全てが片付くというものではありませんでした。実際は、自らが希望する漢点字書を前にした途端に、正しく立ち往生してしまったというものでした。例を挙げれば、現在も続いております「朝日歌壇・俳壇」の漢点字訳です。それまで音訳書やカナ点字の点訳書で読む（聴く）ことはありました。また音訳者の皆様や点訳者の皆様のお話から、和歌や俳句の読みは大変難しいということもお聞きしておりました。しかし既に音声化された音訳書や、カナ（音）表記されたカナ点字書からは、どこがどう難しいのかは全く分かりません。そんな中、漢点字で読むなら先ず短歌や俳句だと考え、「歌壇・俳壇」の漢点字版（当初はまだ本会は誕生しておりませんでした。それは東京・墨田区の点訳ボランティアの皆様にお願ひしたものでした。）を作っていたいただきました。それを初めて手にし

たところ、どこから取り付いたらよいか分からないほどに、読むことができなかつたのでした。音訳者やカナ点字の点訳者の皆様がおっしゃる「難しい」ということの一端を、初めて私は知ることになったのでした。

このことは「歌壇・俳壇」ばかりでなく、他の文学書や辞書にも言えることでした。本当に容易に読めるものではありませんでした。この体験から、この困難を克服した人だけが、「読む」という行為を行い得るのだということ、骨身に沁みて知ったのでした。こうしてまずはこの読みの困難さを何とか克服しなければいけないということが、私に課された課題となつたのでした。このことは私の個人的な体験から申しておりますが、本当に個人的な体験だけに属する体験だと言えるのか、その後多くの皆様との接点を通じて、問い続けることになりました。前回の最後に書きました「謎」とは、正しくこのことに通ずるものと考えております。

* ここで申し上げた「読みの困難さ」とは、点字の触読の「困難さ」ではありません。「文字を相手にする」という「困難さ」で、これは私ども視覚障害者にだけ課された困難ではありません。極めて一般的に

困難です。それとは別に触読の「困難さ」が存在します。その意味から言えば、私ども視覚障害者が文章を読むときには、その文章を「読む」という困難と、点字の「触読」という二重の困難に相對していると言えます。

前回書きましたように「万葉集」は、八世紀後半に成立した歌集と考えられており、収録されている御歌の大半は、奈良時代（白鳳時代と天平時代）に製作された作品と考えられております。わが国最古の歌集とされてはおりますがそれは「記・紀」と並べて言われることで、『古事記』は七十二年、『日本書紀』は七二〇年の成立と、成立年がほぼ確定されているのに対して、「万葉集」の成立年は明らかではありません。しかしこのことは歌集としての成立年が明らかでないことを言っていることで、八世紀後半に成立しているであろうという推定を否定していることではありません。それは、そこに収録されている作品と、その後（「古今」以後）の歌集の御歌の歌風との比較からも推定できることだと考えられます。「記・紀」の成立年が明らかなのは、国史の編纂が急務となったことを踏まえて、元明天皇によって企図されて、各地の風

土記とともに平城京を中心とする国家の存在意義を内外に示すものとして製作されたものであることによります。「記・紀」には、その成立事情について記述されており、成立事情を示す第一資料となっておりません。

しかし「万葉集」は、天皇の命によって編纂された勅撰集である『古今和歌集』やそれ以後の勅撰和歌集とは異なつて、国家の事業として編纂されたものではありません。その意味で、「記・紀」と同様に、わが国「最古の歌集」としてだけ語ることはできないばかりか、その成立年代の不確かさや、収録されている作品の製作年代についても、その鑑賞とともに、工夫が要されるようです。

しかしここにご覧いただければ明らかのように、「万葉集」の収録歌の完成度は極めて高いものがあります。短歌ばかりでなく、俳句や現代詩や小説・文芸批評を志す方々は、挙つてこの「万葉集」に目を通しておられます。この歌集から受け取られるものは、尽きることがないようです。何度も何度も読み返す度に、新たな何かをもたらしてくれる、皆様がそう言われます。

実際どんな御歌が収録されているか、今回漢点字版

が完成した巻第十二から、ランダムに抽出してみましよう。

「正述心緒（せいじゅつしんしよ）」と題された巻です。「ただにおもいをのぶる」と訓読されて、事物に託さずに、直に信条を述べることという意味です。

「相聞歌」の一つの形式とされます。男女の歌のやり取りが主題となりますが、必ずしも実際にその男女が交わした歌とは限りません。むしろ物語を演出する編集として、それにふさわしい御歌を並べているようです。

以下の「」内は、『釋注』の「釈文」にある、伊藤先生の訳です。

*は、私の感想です。

二八四一

我が背子が 朝明の姿 よく見ずて 今日の間
を

（わがせこが あさけのすがた よくみずて け
ふのあひだを こひくらすかも）

「あの方が明け方帰って行かれる姿、その姿はつきり見とどけることができなくて、今日一日中、恋しさにうち沈んでいる。」

* 当時は妻問婚と言われる男が女の許を訪れて結婚に至るといふ婚姻の方式だったとか。この歌は、妻問が始まったばかりの女性の心痛を歌った歌のようです。逢瀬の朝は男は人に気取られずに女の許を去らなければなりません。次は何時訪れて下さるか？

二八四三

愛しと 我が思ふ妹を 人皆の 行くごと見め
や 手にまかずして

（うつくしと あがおもふいもを ひとみなの
ゆくごとみめや てにまかずして）

「かわいいと私が思う子なのに、その子を、世間の人びとがそ知らぬ顔で行き過ぎてしまうように見過ごしていられようか。玉としてこの手に巻き持つこともできないままに。」

* 男のうたです。世の中には目のない人が多いものだ。自慢の彼女を見せびらかしてやろうか。

二八四七

後も逢はむ 我にな恋ひそと 妹は言へど 恋
ふる間に 年は経につつ

（のちもあはむ あになこひそと いもはいへど
こふるあひだに としはへにつつ）

「今は駄目でものちにはお逢いしましょう。

私にそんなに恋い焦がれないで」と、あの子は言うけれど、恋いつづけているうちに、年はいたずらに過ぎ去ってしまったて…。」

* 悲しく辛い片思いの歌か。相思と思いたいが片思いなのだろう。どうも振られたようだ。

二八五五

新治の 今作る道 さやかにも 聞きてけるかも 妹が上のことを

(にひばりの いまつくるみち さやかにも きてけるかも いもがうへのことを)

「新しく切り開いて今できあがつたばかりの道、その道がくつきりと見通せるように、はつきりと聞くことができた。あの子のことについての評判を。」

* 彼女にしたいと思いはじめた女性、その女性の評判が気になる。が、やっと真っ直ぐに伸びた広い道の彼方が見通せるように、よい評判を耳にすることができた。うれしいことだ。

二八五六

山背の 石田の社に 心おそく 手向けしたれ

や 妹に逢ひかたき

(やましろの いはたのもりに ころおそく たむけたれや いもにあひかたき)

「山背の石田の社(やしろに)、いい加減に幣帛(ぬさ)を手向けたとでもいうのか、そんな覚えはないのに、あの子になかなか逢うことができない。」

* 神仏に祈ってまで逢いたいのにお供えの仕方がわるいのか、なかなか逢うことができない。何とかして欲しい!

これら卷十二の御歌は、作者の氏名の記載はありません。一つ戻って卷十一からも何首かランダムに抽出してみましよう。

「寄物陳思(きぶつちんし)」と題された御歌で、「寄物陳思」とは、「物に寄せて思いを述べる歌」と訓読されます。やはり「相聞歌」の一つの分類です。

二四一五

娘子らを 袖布留山の 瑞垣の 久しき時ゆ
思ひけり我れは

(をとめらを そでふるやまの みづかきの ひ

さしきときゆ おもひけりわれは)

「娘子に向かつて袖を振る」という、その「布留」山の瑞垣が大昔からあるように、ずっと久しい年月を思いに思ってきたのだ、この私は。」

* ずっと久しく思い続けてきた娘。「布留山」の「瑞垣」は、永く守られてきた神域だ。私にとつての神域へ袖を振ろう。

二四一九

天地と いふ名の絶えて あらばこそ 汝と我れと 逢ふことやまめ

(あめつちと いふなのたえて あらばこそ いましとあれと あふことやまめ)

「天地というものがもし絶えてなくなるようなことがあるとしたら、その時にこそ、あなたと私と、二人の逢うことも止みもしようが。」

二四二〇

月見れば 国は同じぞ 山へなり 愛し妹はへなりであるかも

(つきみれば くにはおなじぞ やまへなり うつくしいものは へなりであるかも)

「月を見れば、一つ月の照らす同じ国だ。なの

に、山が遮って、私のいとしいあの子はその向こうに隔てられてしまっている。」

* 他国への赴任によってか、離れ離れを余儀なくされた二人、一つの月が照らしているはずなのに、どれだけ辛抱しなければならぬのだろうか？

二四二七

宇治川の 瀬々のしき波 しくしくに 妹は心に 乘りにけるかも

(うぢがはの せぜのしきなみ しくしくに いもはこころに のりにけるかも)

「宇治川のあるこちの瀬ごとに立ちしきる波、この波のように、あの子はひっきりなしに私の心に乗るかかってきて消え去ることがない。」

* 離れた生活を余儀なくされて、瀬の流れを見るごとに、都のあの子を思ってしまう。

卷第十二の「正述心緒」と卷第十一の「寄物陳思」

と題された御歌の中から、四首ずつを抽出してみました。この二つの巻はどちらも、「心をそのまま」と「物に寄せて」として詠まれた御歌で構成されておりませんが、卷第十二の御歌の作者は、明らかではありません。それに対して卷第十一の御歌は、「人麻呂歌

集」から採られたものとの記載があります。しかし「人麻呂歌集」に収録されていたとされる御歌が、全て柿本人麻呂の作歌ではなく、他の歌人の御歌を、人麻呂が記録して集めたものであるとも言われます。そうであれば巻第十一の御歌は、人麻呂と同年代、あるいはそれ以前の歌人作の御歌であることになります。また巻第十二の御歌は、人麻呂より後の時代の御歌の可能性が高いという推測が成り立つのではないかと思われまます。それをさらに時代区分すれば、巻第十一の「人麻呂歌集」から選出された御歌は「白鳳時代」(天武・持統朝)に、巻第十二の御歌は「天平時代」(元明・元正・聖武・…)に作られた御歌であるということができるということになります。

私は「万葉集」を読み始めてからまだ間がありませんので、御歌を鑑賞して申すではありませんが、それでもこの時代区分は、腑に落ちるようになっております。巻第十一の御歌を「人麻呂歌」と言われれば、やや首を傾げたくはなりますが、人麻呂と同時代の歌人の作と言われれば、そうかもしれないと領けますし、巻第十二の御歌はずっと新しい作だと言われれば、そのように了解できまします。白鳳時代、言い換えれば人麻呂の時代に和歌の形式が確立し、天平時代に大輪を開花させたこの「万葉集」の、時空を通して

成長し開花した根・茎・枝葉と大輪の花の一つが、この巻十一と巻十二ということができるのではないのでしょうか。

「謎」はここにるように思われます。

「記・紀・万葉」が世に出て、わが国の文学が始まったと言われます。それまでは文字と言え、剣や碑に刻まれた銘文や碑文がせいぜいで、文章と呼べるものは現代には残っていないと言われます。しかし私が私自身を振り返ってみますと、先人の表した文章に接することなしには、読むことも書くことも叶いませんでしたし、これは誰しもが文章と向き合って自身の読書力・書記力を開発していることによっても確認できることと思われます。

また一方、「万葉集」の御歌の成立年代は、遡っても、せいぜい舒明・皇極朝よりも以前には行けないようです。このことは「万葉集」の初期の作品群を担っていた白鳳時代の歌人たちが、どのようにして文を我が物にして行ったのか、そしてどのようにして現在読めるような、完成度の高い御歌が作られたのかということについて、大きな「謎」であると言ってよいと思われまます。ここに私は、強く関心を引かれます。

(続く)

点字から識字までの距離(一〇七)

野馬追文庫(南相馬への支援)(二五)

山内 薫

二〇一五年十一月、まもなく震災後五年を迎えるという時期に、野馬追文庫の活動を支援して下さっていた「子どもたちへ(あしたの本)プロジェクト」が翌年三月をもって終了することになりそうだ、という知らせが攪上さんから届いた。ついでには野馬追文庫活動の今後を

一、来年三月で終了とする

二、来年八月で本を送り始めてから丁度五年になるので、そこで終了する

三、J B B Yの支援としての希望を出して今後も継続する(私たちの一存では決められず、会議にはからなければならぬと思います)

四、野馬追文庫として独立してやっていく(送り方などのやり方は変更しなないと思いません)

以上四つの選択肢で考えて欲しいと提起して頂いた。

そこで福島で協力して頂いているお二人のご意見を

先ず聞いてみることにした。

Yさんからは

「仮設のはずがもうすぐ五年といういわば異常な状況が続いているわけで、終了するのは忍びないようにも思いますが、最近では、どちらかといえば施設への支援にシフトしてきているようにも思います。施設からは引き続きの支援を望まれているのではないかと思っています。そのあたりも考える必要があると思います。

何事も始まりがあれば、終わりがあります。様々な事情で支援が終わるといえることがあれば、それも受け入れなければならぬと思います。これまでのご厚意に感謝いたします。

五年という歳月は、本当に長く、そして厳しい道のりでもありました。福島は完全に復興したわけではなく、仮設住宅ももちろんありますが、やはり五年という歳月をすぎた今は、被災直後の状況とは異なっています。厳しい言い方をすれば、被災者であっても自立の道を歩む方法を考えていかなければならないのではないかと思います。もし、支援を続けていただくとにしても、支援を受ける人たちがこれからどうしようとしているのか、その目的にかなうような支援に変え

ていくことが必要かと思えます。では、具体的にどのような支援と言われても頭には浮かびませんが、支援を受ける側と支援する側の意思確認は必要かと思えますが、いかがでしょうか？」

Sさんからは

「私が住む福島市と南相馬市の状況が違うかもしれないので、判断が難しいです。福島市では、震災直後とは違ってきています。例えば、図書館見学に来た子どもたちが外の芝生の上でお弁当を食べたり、どんぐりを拾ったりするのが見られるようになりました。今でも図書館では、敷地内のそれぞれの場所の環境放射線量をお知らせしています。学校や保護者が判断して、原発事故以前のような行動をとっている人も多く見られるようになりました。安全だと判断してのことかどうかは分かりません。職場復帰後、たまたま返却された『うさこちゃんのにゅーいん』を読んで、ぎよつとしました。うさこちゃんは、のどが痛くて入院し、手術してしまいました。読後、私はその本の初版年を確認してしまいました。チエルノブイリ原発事故よりも前の作品であったことに、少しほつとしました。私には甲状腺がんに見えたからです。それでも、もし、甲状腺がんの子どもが入院を不安に思ったら、この本

で勇気づけられるかもしれないと思いました。

震災から五年になります。さまざまな苦難に遭ったとしても、家族と一緒にいられる子どもは幸せなのではないでしょうか。五年で一区切り、でよいのかもしれませんが。福島の子どもたちには、たくましく生きてほしいと思います。選りすぐりの絵本を手渡し、お話の世界を子どもたちに届けたら、次は図書館でたくさんの中から自分で選ぶ、というステップに移ってもよいかもしれません。南相馬には、よい図書館もあります。私は自分自身、被災者ということで甘えてしまっているのではないかと 思うことがあって、そう考えました。

震災直後、ラジオのDJの『がんばれる人が、がんばれる時に、がんばれるだけ、がんばればい』という言葉にはげまされました。私は、がんばれる時とがんばれない時がありました。でも、震災からもう五年です。子どもが身近にいる大人は、決断し、歩き出さなければならぬ時期だと思えます。」

以上のようなご意見を頂いた。

それに対して攬上さんは

「野馬追文庫の今後について真摯なご意見を誠にあ

りがとうございました。なにか物事が分かりながらやってきたわけではなく、これでいいのかこれでいいのかと常に迷いながら向きあつてまいりました私たちにとりまして、おふたりのご意見は常に大きな導きです。

私も昨日発送のあと、ジネットの方、JBBY事務局の方とは今後についての話を交換しました。ジネットは、一月が総会なのですが、来年度も今ままでおりの支援を決めてくださっており、今までに集まった寄付金を来年度もかなり多額ですがくださる準備があるということ。必要ならば、更なる支援体制の強化も考えているとおっしゃってくださいました。JBBY事務局とも、野馬追文庫に限らずに、JBBYの今後の東北も含む IBBY Children in Crisis 全体をどうしていこうかということ、この三月あしたの本プロジェクトが終了するにあたって、考えていく良い機会との意見で一致しています。あしたの本の終了と共に、JBBYの支援を再考する話し合いを担当者で持ちますし（私も含む4人が今年は担当になっています）一二月に南相馬に行った時には、南相馬の人たちの声を聞いてきます。支援の仕方は今の状況を見な

がら変えていくことは必要ですし、自分たちがこれから何がどれだけできるかの実際の見通しも必要でしょう。一日に毎月本を届ける、その時その時の南相馬を必ず思う、忘れない、当事者でもなく、被災地に住んでいないものにとつて、忘れないでいることはそう有りたくないとの気持ちとは裏腹にやはり生活の中に入れこんでおくことは難しいことですがこの五年間見事に私の中から「忘れる」ことはありえませんでした。この支援の方法を、何か少し形は変わったとしても、つなげていきたいとは私自身は思っています。結論というか新しい方向はお二人からいただきました意見も大事に受け取りながら、三月ぐらいまで時間をかけて考えていきたいと思えます。」

という方向を示し、現実にJBBYの「希望プロジェクト」という形で野馬追文庫の活動を継続することとなった。

JBBYの希望プロジェクトのパンフレットには「JBBY希望プロジェクト」について

災害、貧困、DV、障害、放射線被害など

日本の子どもたちは様々な困難と

隣りあわせて生きています。

困難を抱えた子どもたちに

希望をもって生きられる未来を―

日本での「子どもの本」を通じた支援に

ご協力をお願いします。

という標語が載っており、「チルドレン・イン・クライシス」と希望プロジェクトについて下記のような説明が載っている。

IBBY(国際児童図書評議会)とチルドレン・イン・クライシス(「危機にある子どもたち」)について

「IBBYは、戦後の混沌としたドイツで、戦争のない未来のために子どもの本を通して国際理解を深めようと一九五三年に発足した国際ネットワークです。現在は約八〇の国と地域が加盟し、子どもの本には人と人、国と国の間に理解をもたらし平和を築く力がある」と信じて活動しています。IBBYでは、二〇〇四年のスマトラ沖地震を機に基金を募り、チルドレン・イン・クライシスという、国境を越えたプロジェクトを発足させました。世界各地の紛争や災害、迫害などの危機に直面した子どもたちに、本を通じて心をいやし、状況に応じた本を届ける活動に資金を提供しています。―

IBBY(日本国際児童図書評議会)と「希望プロジェクト」について

「IBBYは、一九七四年にIBBYの日本支部として発足し、『子ども・本・平和』にかかわる様々な活動を行ってきました。そして、二〇一一年三月に起きた大地震と津波、それに続く原発事故という未曾有の災害のあと、IBBYチルドレン・イン・クライシスの精神に基づく国内での活動を始めました。被災した子どもたちのために、子どもの本を通しての支援活動『子どもたちへ(あしたの本)プロジェクト』を発足させ、陸前高田市に子ども図書館を開き、気仙沼市や石巻市に図書館バスを走らせ、南相馬市に定期的に本を届けてきたのです。子どもの本に関わる複数の団体と協働しながらの五年間の活動でした。そこで培った経験や反省を生かし、IBBYは日本国内の困難な状況にある子どもたちに、本で希望の灯をともせるよう、新たに独自の活動をスタートさせます。これが『IBBY希望プロジェクト』です。―

かくして、IBBYとジネットの協力のもと毎月一日に本を送る活動は継続して実施できることとなりました。

ところで、Sさんの文中にディック・ブルーナの『うさこちゃんのゆういん』が出てきたが、この月（二〇一五年一月）に送った本がうさこちゃん生誕六〇周年を記念して出版された大判の『うさこちゃんのおたんじょうび』（福音館書店 二〇一五）だった。この本を巡って交わされたメールをご紹介します。

「野馬追文庫—月分共通本は六〇周年記念版「うさこちゃんのたんじょうび」福音館書店にお届けしました。大きく、色がよりくつきり際立つ版で、手にとったとき、懐かしさもありましたがふしぎに何か新しいうさこちゃんに出会ったような気もしました。うさこちゃん六〇歳！いま、のまおいぶんこは、主に子育て支援の場所に本を届けていますが、子育て中のお母さんたちには自分も懐かしい絵本だろうと思います。福島県立図書館のSさんが療養中に何気なく私達にくださった以下のメールが、この本を選んだきっかけになりましたので、そのSさんのメールも……。」

★Sさんメール

「うさこちゃんのシリーズの中で、私が一番気に入っているのが『うさこちゃんとうみ』です。この『うみ』は、私にとって相馬の海でした。私の住む福島市

から山をこえて、相馬の海によく行っていました。海といえば、相馬の海だったのです。震災後の新聞で、うさこちゃんが泣いている絵を見たとき、私は泣きかけたのだ、と気づきました。気づいた時には泣いていましたが。うまく言えませんが、『うさこちゃん』は、私だ』と思いました。大人になって、世の中についての知識を重ね、物分かりがよい大人のふりをしていただけで、ほんとうは、ただ、ただ、悲しくて、不安で、泣きたかったのだと、分かったのです。

うさこちゃん、マドレーヌ、マックス、どろんこぶた、『ラチとらいおん』のらいおん……。この年になっても、気がつくど私を支えてくれているものが、絵本のなかにあります。子どもたちも、そういう絵本に出会ってほしいと思います。子どもの頃、文字を読むのが苦手でしたが、母が読んでくれたおかげで、たくさんのお話と出会うことができました。子どものときに『うさこちゃん』に出会えて、幸せだと思っています。」

★原町保健センター Oさんより

「いつもありがとうございます。やさしい絵本が届きました。そして、少し休まれているという司書さんの文章を読んでいたら、なぜか涙が出ました。だんだ

んと、忘れていきそうなことを、ふと、思い起こせる時間が持てるのは大切なことだな、と思います。お贈りいただいた絵本を、保健センター内の受付前の待合室の本棚ラックに入れて自由にお読みください、と、表示しています。この前、妊娠届にいらしたママと、お子さんとおばあちゃんがいたのですが、ママが申請書を書いている間、おばあちゃんに絵本を読んでもらっていて、とても素敵な情景でした。絵本に感謝です。お送りくださっているジネットの皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。」

★ちゅうりっぷ文庫 Jさんより

「絵本届きました。さっそく、お話会に読みました。小さい時母に読んでもらいましたと言うお母さんがいて懐かしがっていました。絵本は読み継がれるものだと痛感しました。次女の嫁ぎ先の母は、孫のお土産に毎月一冊うさこちゃんシリーズをプレゼントしていました。福島司書さん時間が解決してくれると思います。無我夢中で頑張りがすぎたのですね、今度は、ご自身の為の休息に時間を使う事を、オススメします。」

★かのん（障害児発達支援事業所）Nさんより

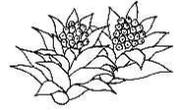
「絵本のプレゼントありがとうございます。ちいさ

なうさこちゃん私たちにとっても馴染みのある絵本で、昔人所施設の子どもたちの部屋にと、「ちいさなうさこちゃん」の絵を模倣しながら手作りカレンダーを作ったものでした。今回お送りいただきました絵本は子どもたちもとても気に入って、昨日開封してから早速未就学児さんの読み聞かせに使わせていただきました。勿論午後から学童児さんも自分でかのかん図書コーナーに行き、手に取って読んでいたようでした。とっても絵がかわいくて、シンプルだけどころさんとメッセージを持っている、だれもが一度は手にしたことがある素敵な本ですね。私は子どもが育つまで障害児の入所施設に長く勤めていたため、子育ては仕事の忙しさにかまけて手抜きしていたことを、現在の仕事を通じて今反省しております。逆に、うちの嫁はお母さんがいつも読み聞かせをしてくれ、小さいころから絵本を通してたくさんの事を学んだようです。

また、震災前まで高等学校の司書として働いていたこともあって、一歳の孫に毎日絵本の読みかかせをして大切に育ててくれているようです。やはり絵本は言葉と心を育てる素敵なツールですね？」

「東京漢点字羽化の会」第145～147回 例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2018年1月の例会（第145回）1月10日（水）

13…30～15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

「横浜羽化の会」の木下様が機関誌『うか』のバックナンバー1から「PDFファイル」にしてくださいました。スマホやパソコンからダウンロードすると、全部読めるという。紙に印刷された「羽化」そのものは、2、3年分を纏めて製本されている。これでデータ保存と、二通りの方法で保存されることになった。横浜の初期のご苦労は今とは違った意味で大変だったと思う。

木下様、岸田様、他皆々様ありがとうございます。

朝日の記事の入力のグループ分けをしていただいた。

4月の活動予定を決めた。

1月17日の印刷を会員の皆様にお願ひした。

岡田さんが入力の記事についてお話しし、最近の新しい言葉についての書き方などお話が大きく広がった。

2018年2月の例会（第146回）2月7日（水）

13…30～15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

朝日「歴史学」入力のグループ分けをした。

先月の例会で、新しい言葉の書き方についての話があり、それに引続いて英米ではどのような記号を使っているかなど具体的に英語の雑誌を取り寄せていただいていた岡田さんが説明してくださいました。

2018年3月の例会（第147回）3月7日（水）

13…30～15…30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

今月の3月15日は、菅野良之様が亡くなられて1年をお迎えする。会のはじめに皆様で心を傾けて黙祷を捧げた。

何時ものように朝日の記事入力のグループ分けを決めた。

3月21日は横浜で、点字印刷にお二人の方が引き受けてくださった。何時もありがとうございます。

5、6月の活動予定を決めた。

古語辞典の進捗状況を確認し、本文が終えても参考文献その他辞典には大切なものが沢山あるので、まだまだ大変である。皆様今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

これまでに皆様に入力をしていただいたものうち、まだ校正が終わっていないものの本について再確認し、どのようにするかを話し合った。

* 予告

- 2018年4月の例会(第148回) 4月11日(水)
13..30~15..30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
2018年4月の学習会(第119回) 4月21日(土)
17..30~19..30 ヒューマンプラザ7階第2会議室
2018年5月の例会(第149回) 5月9日(水)
13..30~15..30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
2018年5月の学習会(第120回) 5月19日(土)
17..30~19..30 ヒューマンプラザ7階第2会議室
2018年6月の例会(第150回) 6月13日(水)
13..30~15..30 ヒューマンプラザ7階第1会議室
2018年6月の学習会(第121回) 6月16日(土)
17..30~19..30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

わたくしごと

そぼ降る春の雨の中、久しぶりに会った友と新宿御苑を散策していた。沢山の花の中を、かなり永いこと歩き、わたしの手の届く限りの花々を触らせてくれた。

広場になつているところでは、お日様があれば、ベンチに座れるのだが、細かい雨とはいえ、やはり雨に打たれるのは冷たい、と思つていたら、彼女が

「あら、あそこのベンチは濡れていないわ。ちょっと座つて休みましょうか」と誘つてくれた。

ベンチに向かつて歩いて行くと傘に当たる雨音はなくなつていった。

真夏の暑さも避けられるだろうと思われるほど大きな木があつて、二人は座つた。本当にベンチはぜんぜん濡れていない。人も通らず秘密の話もできそうだ。

暫くして寒くなつたわたしは、「ここには温室もあるわね」と、温室へ行くことにした。

温室に入ると最初はホワーッと暖かかった。

雨のせいか見学者もいないようだ。少なくとも話し声

は聞こえなかった。ここでも彼女はできる限り一杯熱帯の樹や葉や花々を触らせ、添えられている説明文も読んでくれた。中にはトゲトゲだったり針のような鋭いものもあって、「これは痛いから気をつけてね」と前もって注意しながら、一所懸命、一つでも多く触らせてわたしを喜ばせてくれた。

教えてくださった名前はその時直ぐ復唱し、触った形と一緒に頭に入れるつもりなのだが、覚えるより忘れるほうが速いのは情けない。

ときどきわたしは、

「あ、さっきのあの木肌がすべすべしたのをもう一度見せて？」

「上から垂れていたあの花はなんでしたっけ？」
などと言っては戻って、も一度楽しんでいた。

ある箇所で、見事なバラのような、(だったかなあ、友よ、ご免なさい!) それでも触っても花びらが簡単に散るようなものではなかったが、豪華な花を沢山咲かせてくれているのを触っていた。

するとそこへ少数のグループではあるが、一組入ってきて、やはりわたしたちがいるところまでやってき

た。そしてその中の一人が、

「あら、触ってはいけないのでしょ？」と言った。
するとわたしの友が即座に毅然として言った。

「この方は触らなければ見られないのです。」
ややあって、非難がましいことを言った人が、小声で、

「ご免なさい」と言った。

友は、「はい」と言い、わたしは頭を下げた。

そのグループはなんとなくきまり悪そうに、でも何事もなかったかのように少しづつその場を離れて、目を引く他の植物へと移って行った。

友はあたりまえのようにまだまだ沢山ある、大きいもの、かがんで見るもの、「うーん、これはここからは遠すぎてだめだわ」といいながら花の色、形を説明してくれた。

気が付くとさっきのグループの声は聞こえなくなっていた。

「ねえ、さっきの人たちもうここにはいらっしやらない？」と確かめてから、「さっきは気まずい思いをさせてご免なさい」というと、彼女は、「え？ああ、

あのこと？あれは当然のことを言っただけで、ぜんぜん気にしていないですよ。ただこういうことを分らない人が多いから、むしろ丁度よかったのよ」と本当にさっぱりしている。

わたしは、

「ねえ、それではさっきの、また見に行ってくれませんか？そしてここを出しましょう」と言い、先ほどよりゆっくり丁寧に触って温室を出た。

「わあー、綺麗な桜が一杯！といっても群れをなしているのではなく、こつちに一本、あつちに一本つて具合に桜があるのよ、行きましょう。：

この桜の名前は、ウミネコ」

「え？なんて言った？」

「ウミネコ」

「桜の名前よねえ」

「そう、白くてとっても綺麗なの」

もちろん触った。

「あつちにもある。えーとこれはオカメ　：まだあつちにもある、えーとこれは大黒（だいこく）」

あんまり奇妙な名前なので、とうとうわたしは笑い出してしまった。

「わあー綺麗、これはちよっと、これからなのかなあ。たいはくと書いてあるわ」

「いったいどんな字を書いているの？」

「太白、ふといに白」（と彼女は言ったと思う）

彼女は更に言った。「英語では、グレイト・ホワイト・チェリーと書いてあるわ。：ああ、ここに解説がある」と言つて、

これらの桜はイギリスの桜収集家、コリング・ウッド・イングラム氏が日本の桜、特に山桜を愛し、日本から多種類の苗を取り寄せて自分の庭で育てた。ところがこれらの桜が、日本では滅びていく一方なのを惜しんで、かつて日本から取り寄せた桜を、日本に（お返し）する目的でこれらの桜の苗を送ってくれたものである…。

のような概略しか覚えていないが、（チェリー・イングラム）くらいは覚えていようと思った。それにこれ

だけの業績を残した人のことなら、既に本になっているだろうとも思った。

この〈桜物語〉のお陰で、先程来のちよつと落ち込んだわたしの気分は、ほつと和んで、その後の彼女との食事も会話も楽しめた。わたしはちよつぱり苦い固まりを残しながらも、彼女がその場しのぎのぎのことを言ったのではなく、心底へ触って見ることを大切に行っているのを知っていたので、この話題に戻りたくはなかった。

その後、わたしは偶然一冊の本を見つけた。タイトルを見てこれに間違いないと感じた。

『チェリー・イングラム Ⅱ 日本の桜を救ったイギリス人』〔阿部菜穂子（なおこ）著 岩波書店〕である。

大急ぎで借り、夢中で読んだ。

コリング・ウッド・イングラムは1880年10月30日、ロンドン生まれで、虚弱児で、11歳のとき母メアリーとケンブリッジのウェストゲイトの別荘で暮らした。

父ウィリアムは週末にこの別荘に帰ってきた。二人の

兄は全寮制の寮で暮らしていた。イングラムにとってここは鳥類研究家、桜研究家としての基礎を作る最適な環境であった。山、森林、海辺、沼地が一杯だったから。

イングラムは1902年(21歳)、1907年(27歳)、1926年(45歳)と3回訪日し、そのおりに長崎、神戸、富士山麓、日光、箱根、京都、松島、仙台、東京の小金井、荒川堤防などで桜に魅せられた。

第一次世界大戦後の1919年に、イングラムはウエストゲイトからジェネンドンの「ザ グレンジ」に居を移した。その家に、樹齢25年ほどの見事なジャパニーズチェリー2本と、ユーカリの樹1本が植えられていた。

この桜が彼の桜熱を刺激したようだ。彼は、ここに桜園を作ることに決めた。

6年間に70種以上の多種類の桜を集め、新種を造り、それらを沢山の人に見て楽しんでもらい、申し出があれば、苗や穂木（ほぎ）を無償で提供した。イングラムが初めてイギリスに導入した品種は最終的には50品種にも及んだが、全てザ グレンジから普及し

た。こうして日本の桜はイギリスばかりでなくアメリカ カナダなどにも広がった。

1926年、3度目の訪日で、イングラムは、既に日本桜がソメイヨシノに圧倒され、古来の山桜や里桜が滅びかけ、手当をしなければ50年で全滅するだろうと、日本の「桜の会」の席で警告した。

そして、日本の友人たちから桜収集に協力してもらった（おかせし）の意味で、イングラムは「太白」その他の苗を日本に送る約束をし、イギリスから日本へ6度（1年に一度の機会）も穂木の輸送に失敗しながら苦勞の末7年目の1932年に、京都の植木職人が接ぎ木に成功させた。穂木を枯らさないように大根に刺して、暑いところと、寒いところを一ヶ月もかけて輸送するのは桜にとって無理があった。最後は穂木をじゃがいもに刺してシベリヤ鉄道を経て日本に送り、無事桜は枯れずに届いたのである。

この本には、桜が間違った形で軍国主義イデオロギ―に使われたこと、また、その軍部に抗して命がけで桜の苗圃（びょうほ）を守り抜いた桜守りたちがいた

ことなども書かれている。

わたしはイングラムの桜収集にかける熱意にただ感心しながら読んだ。

ところがこの本の半ばを過ぎてからの展開はわたしを仰天させた。

イングラムの3人の息子は太平洋戦争の連合軍に従軍し、家族は、その安否を気遣っていたが、息子たちはポチポチと帰ってきた。

しかし、3番目の息子アレスターの婚約者ダフニーは1940年9月（ダフニー26歳）、ホンコンの病院で連合軍の従軍看護婦をしており、家族は、ダフニーの安否が分からず心配していた。

1945年8月15日、日本の敗戦によって、ダフニーは3年もの日本軍の捕虜生活から解放されて、やっとイギリスへ帰って来られたのである。

二人は1947年、ロンドンで結婚式を挙げ二人の子供ももうけて暖かい家庭を作った。

このダフニーの生き方にわたしは衝撃を受けたのである。

1971年10月、昭和天皇が初訪英した折り、イギリスでは、日本軍の捕虜にされた多くのイギリス人が、日本の蛮行を許さず、天皇が植樹した杉の木を引き抜いたり、日本の旗を焼いたりして、激しく抵抗した。

1993年、イギリスの元日本軍捕虜団体（POW）は保障を求めて日本政府に提訴した。

ケント州在住の、ニコラ・タイラーという女性ジャーナリストが、2008年はじめに、『シスターズ イン アームズ』（従軍看護婦）という本を出版した。

これは、戦時下、女性がどんな被害を受けたか、聞き取り調査をしたものを纏めた本である。

2007年、ニコラ・タイラーは、93歳になっているダフニーのところへも尋ねて来た。

ダフニーは、あの悪名高い（黒いクリスマス）のことを初めて、この女性ジャーナリストに語った。

イングラムを含めて家族の誰一人、このことを知らなかった。タイラーがダフニーを訪問した時には、既

にイングラムも、その妻も、更にダフニーの夫も亡くなっていた。

この本が出版されて、タイラーのサイン入りの本が贈られてきたとき、ダフニーは自分で読むことができず、息子が音読した。

ダフニーは、家族の平安を保つために、この忌まわしい事件を自分一人の心にしまい込んでいたのである。わたしには、このダフニーの強さと限らない優しさが深く身に染みした。

日本の桜をこよなく愛した義父イングラムのことを（チェリー）と呼び、ダフニーとイングラムの二人は善い関係であった。ただ、「二人の間では日本についての話題は暗黙のうちに避けられていたのだろう」と、ダフニーの子ども孫も述べている。

[注]

1975年5月、ダフニーの夫アレスター病死。

1979年、イングラムの妻死去。

1981年5月19日、イングラム百歳6カ月で死去。

2008年はじめにニコラ・タイラー『シスターズ・

イン・アームズ』（従軍看護婦）を出版。

2008年11月24日、ダフニー94歳9カ月の生涯を遂げた。

わたしは、この『チェリー イングラム』日本の桜を救ったイギリス人』を読み終えてから、イギリス在住のホームズ・恵子著、『アガペ、心の癒しと和解の旅』（命の言葉社発行）を読んだ。この本は「イギリスPOW」の人たちと日本との和解を求めて奔走し、元日本軍の捕虜の方々を、日本に招いて交流を続けている、ホームズ・恵子さんご自身の報告である。

続けて直ぐ、『癒しと許しへの旅』日本軍捕虜となった人々の戦後50年』（ステイブ T ヤング、ジョン M L ヤング 著、菅野和憲 訳、栄都出版）を読んだ。

ステイブ・ヤングの本は、主にアメリカ人が受けた捕虜生活の苦しみ、「凍結した激怒」（「frozen rage」）から、解放され、憎んでいた人々を許すことができるようになって、ついに「内的平安」（「inner peace」）を与えられた人

々、高潔な魂を持った方々を尋ね、その心の旅を丁寧に辿って聞き取ってくださった本である。

わたしは、この〈凍結した激怒〉という言葉に全身を打たれた。それを〈内的平安〉へと導くのは並大抵なことではないと思う。まして多くの捕虜体験者たちは心の痛みだけではなく現実的に肉体的傷を負い続けているのである。

〈黒いクリスマス〉（1941年12月25日）という言葉は、アメリカやヨーロッパの、戦争に関わる本を読むと、戦争の無残さの象徴として使われている。具体的に説明されなくてもキーワードとして使われている。

なによりも、当時の日本の軍部が、学校や病院を戦場にしてはならないという国際条約を批准しながら、そのトップは、ことの重大さを重んぜず、現場の軍隊にこのことを伝えていなかったのか、それとも現場の軍幹部も、ことの重要性を無視したのか、傍若無人な行為を行ったことにわたしは嫌悪と怒りを感じてい

る。国際条約（ジュネーブ条約）では捕虜の扱いについても人道的に処すること、とあったのを、日本の軍部はこれを拒否したのだという。

ダフニーがいた病院では、赤痢患者が出て、ジフテリア患者が出て、日本軍は必要な薬を出してくれなかった。看護婦長が毎朝交渉してもだめで、とうとう最後に少量の薬をくれたが、それはもう期限切れのものであった。食料は粗悪で少なく、更に非衛生的でもあった。

ダフニーたちはお湯を飲んでおなかの足しにしたが、当然栄養失調だった。

イギリスでは、ナイチンゲール以来のことで、看護婦は男性と対等の職業婦人であるが、日本軍はそのことも知らずに無礼な待遇をした。

戦争は人間が始めるのだとつくづく感じている。戦争をすることでもいい思いをするのはごくごく一握りの人で、大多数が苦しみと悲しみ、痛みを負うのである。

2018年3月13日（日）

「報告と案内」

一 賛助会費を頂戴致しました

左の皆様は、昨年・二〇一七年度に、本会に賛助会費をご納入下さいました皆様のご芳名です。深く御礼申し上げます。

村田忠禧様、大滝正雄様、坂口喜代様
雨宮絢子様、岡 稲子様、河村美智子様
政井宗夫様、武田幸太郎様、木原純子様
関口常正様、田崎吾郎様、遠藤幸裕様
吉野紀恵様

大変ありがとうございました。有効に使わせていただきます。

二 『萬葉集釋注』第六卷

横浜漢点字羽化の会では、現在『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の漢点字訳を進めております。同書は、全十巻の構成で、各巻に「万葉集」の巻全二十巻の、各巻が二つずつ収められ（25ページへ続く）

漢文のペーシ

孔子が最も愛した弟子

顔回

哀公問、「弟子孰為好學」。

孔子對曰、「有顔回者。

好學。不遷怒、不貳過。

不幸短命死矣。今也

則亡。未聞好學者也」。

(『論語』雍也)

哀公(あいこう)問う、「弟子(ていし)孰(たれ)をか學(まな)むと為(な)す」。孔子對(こた)えて曰(い)く、「顔回(がんかい)といふ者(もの)有(あ)り。學(まな)むを好(この)む。怒(いか)りを遷(うつ)さず、過(とが)ちを貳(ふた)た(た)びせず。不幸(ふしこう)短命(たんめい)にして死(し)す。今(いま)や即(すなは)ち亡(な)し。未(な)だ學(まな)む者(もの)を聞(き)かず」。

哀公(あいこう)魯(ろ)の君主(きんしゅ)。在位(ざいゐ)前四九四(ぜんしゆじゆ)〜前四六八(ぜんしゆはち)年(ねん)不遷怒(ふせんぬ)〓八(はち)つ當(あた)りをし(し)ない。不貳過(ふじこ)〓同(どう)じ過(とが)ちをくりかえ(か)さない。

参照(さんじゆ)図書(と)書(しよ)

『朗讀(らうだく)してみたい(みたい) 中国(ちゆうごく)古典(こてん)の名文(なもん)』渡辺(わたべ)精一(せいいつ) (祥伝社(じやうでんしゃ)新書(しんしよ))

孔子の顔回を評する言葉

顔回(がんかい)は名譽(なご)榮達(えいたつ)を求め(もと)めず、ひたすら孔子(こうし)の教(きやう)えを理(り)解(かい)し実践(じつせん)する(する)ことを求(もと)めた(めた)。その暮(くれ)らしぶりは極(ごく)めて質(しつ)素(そ)であつた(あつた)とい(い)う。

吾(われ)與(よ)回(かい)言(い)終(しゆう)日(じつ)、不(た)違(わ)ざること

如(ごと)し。愚(おろ)し。退(しりぞ)きて、省(そのしを)みれば、亦(また)

足(も)つてはつするにたれり。回(かい)也(や)不(ぐ)愚(ならず)。(為(い)せ

「回(かい)はわたしと一日(いちじつ)じゆう話(わ)をして、全(ぜん)く従(したが)順(じゆん)で

「異(い)説(せつ)も反(はん)對(たい)もな(な)く」まる(まる)で愚(おろ)か(か)のよう(よう)だ。だ(だ)が引(ひ)

き下(くだ)がつてからそのくつろい(い)ださまを觀(かん)ると、や(や)は

でな(な)い。」「(わたし)の道(みち)を」發(は)揮(き)するの(の)に十(じゆう)分(ぶん)だ。回(かい)は愚(おろ)

賢(けん)哉(かな)回(かい)也(や)。一(いつ)簞(たん)食(じき)、一(いつ)瓢(びょう)飲(いん)

在(ざい)陋(ろう)巷(がう)。人(ひと)不(た)堪(かん)其(か)憂(う)、回(かい)也(や)

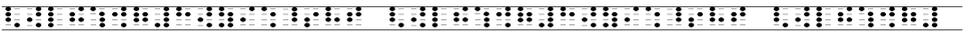
不(な)改(か)其(か)樂(らく)。賢(けん)哉(かな)回(かい)也(や)。(雍(よう)也(や))

「えらいものだね、回(かい)は。竹(たけ)のわりご一杯(いっぱい)のめしと

ひさごのお椀(わん)一杯(いっぱい)の飲(の)みもので、せまい路(みち)地の(ぢ)くら

が、回(かい)は「そう(そう)した貧(ひん)窮(きゆう)の中(なか)でも」自(みづか)分の(ぶん)樂(らく)しみを

(訓讀(くんだく)と訳文(やくぶん)は、岩波(いわなみ)文庫(ぶんこ)『論語(ろんご)』金谷(きんこ)治(ぢ)訳注(やくちゆ)による)



哀 公 問 フ、「弟 子 孰 ヲカ 為 ス
 好 ムト 学 ヲ」 。 孔 子 対 ヘテ 曰 ク、
 「有 リ 顔 回 トイフ 者 。 好 ム 学
 ヲ。 不 遷 サ 怒 リヲ、 不 貳
 ビセ 過 チヲ。 不 幸 短 命 ニシテ 死
 ス 矣。 今 也 則 チ 亡 シ。 ズ 未
 ダ 聞 カ 好 ム 学 ヲ 者 ヲ
 也」 。 (雍 也、ようや)



がんかい がんえん
顔回 (顔淵) 魯(ろ)の人で、姓は顔、
 名は回、字(あざな)は子淵。孔子より
 37歳若い弟子(年令は異説が多い)。

「回也聞一以知十。賜也聞一以知二」
 (公冶長)

しこう たんぼくし
 弟子の子貢(端木賜)に、お前と顔回
 とどちらがすぐれているかと孔子に
 たずねられた時の子貢の言葉。これに
 対して孔子は「そうだね、私もお前も
 顔回にはかなわないね」と言っている。

顔回は弟子の中でも最も孔子の信認があつく、後継者として
 期待されていたが、若くして師よりも先に亡くなった。

顔淵死。子曰、「噫、天喪予。天喪予。」 (先進)

「ああ、天われをほろぼせり。天われをほろぼせり。」
 と孔子は慟哭して、顔回(顔淵)の死を嘆き悲しんだ。

(22ページから続く)ております。その全十巻を、毎年一巻ずつ製作して、横浜市中心図書館に納入しております。

二〇一七年度の分として、この度完成しましたのが、その『萬葉集釋注』第六巻です。この巻には、「万葉集」の巻第十一と第十二が収められております。どちらの巻にも「正述心緒(シヨウジュツシンシヨ)」と「寄物陳思(キブツチンシ)」と題された御歌が収録されております。前者は「ただに思いを述べらる」歌、後者は「物に寄せて思いを陳ぶる」歌と訓読されております。ここで言う「思い」とは、男女の「思い」のことです。それを心のママに表現しているか、あるいは物や事柄になぞらえて表現しているかというところで選別して編集されているようです。男の歌・女の歌、女の歌・男の歌と相対して置かれて、男女の思いが相響き合うように配置されており、「相聞歌」の類と解されております。

巻第十一の御歌は、左注に、「人麻呂歌集」から選出されたと記載された御歌が並びます。「人麻呂歌集」は、柿本人麻呂の作歌、あるいは人麻呂が収集し

選歌して収録した御歌が収められた歌集と言われており、「万葉集」の編纂に当たって、その編集方針に従ってそこから選歌されて収録されているものと考えられております。「人麻呂歌集」はその意味で、歌集としては現在に伝えられておりませんが、この「万葉集」の中に、ほぼ網羅されているものと考えられます。ランダムに一首ずつ抽出しましょう。

寄物陳思

二四九四

大船に 真楫しじ貫き 漕ぐほとも ここだ恋
ふるを 年にあらばい

(おほぶねに まかぢしじぬき こぐほとも こ
こだこふるを としにあらばい)

正述心緒

二五六九

思ふらむ その人なれや ぬばたまの 夜ごと
に君が 夢にし見ゆる

(おもふらむ そのひとなれや ぬばたまの よ
ごとにきみが いめにしみゆる)

卷第十二は、作者未詳の御歌で編集された巻です。

「万葉集」の編纂者が集めた御歌で編集されたものと考えられております。卷十一より下った天平期に作られた御歌が中心になっております。同様に一首ずつ抽出します。

正述心緒

二九二一

たわや女は 同じ心に しましくも やむ時も
なく 見てむとぞ思ふ

(たわやめはおなじこころに しましくも やむ
ときもなく みてむとぞおもふ)

寄物陳思

二九六五

椽の 袷の衣 裏にせば 我れ強ひめやも 君
が来まさぬ

(つるはみの あはせのころも うらにせば わ
れしひめやも きみがきまさぬ)

味わいのある御歌ばかりです。

三 日本漢点字協会

川上泰一先生の奥様で、日本漢点字協会の会長をお勤め下さっておられた川上リツエ様が、昨年(二〇一七年)の四月五日に、ご逝去されました。月日の経つのは誠に早いもので、あつという間に一年を過ごしてしまいました。

しかしながら協会の活動についての公式な見解は、未だに出されておりません。いわゆる風の噂のようなものは聞こえて参りますが、核にえられる方々からは、何も発信されないままになっております。

その微かな噂のような声からも、漢点字の普及のための施策、たとえば広範囲のPR活動などというものは聞こえてまいりません。

一会員である私どもは、取りあえず待ちの姿勢を取り続けるしかないようだというのが、現状のようです。誠に残念です。

川上リツエ様のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

編集後記

私事になりますが、先日、みなとみらいの大ホールでコーラスの発表をする機会を得ました。国際シニア合唱祭「ゴールデンウエーブ in 横浜」と銘打った高齢者のコーラスグループの発表会で、毎年開催されて今年も10回目となります。コンテストではありませんが、専門家の先生たち数人がそれぞれちゃんとした講評を書いてくれるので、大いに励みになります。何回か連続して出場すると、表彰状が頂け、われわれのグループは5回連続の出場ということで、立派な表彰状をいただきました▼出場したグループの中で目にしたのが、視覚障害者を示す白杖について、壇上に上る男性でした。眼鏡をかけておらず、遠目に見たところでは目が不自由だということを感じさせませんが、大きな口をあけて堂々と歌っている様子が印象的でした▼その人が漢点字をご存じかどうか、知るよしもありませんが、歌の歌詞を漢点字で読めるようになったら、すばらしい世界が開けてくるのではないかと、つい考えを飛躍させてしまいます。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。